

子供は、父親模範を目の前にみて、疑いもなしに父親の価値観を受け入れ、内面化して成長した。こういう父子のタテ関係が、人間形成の原型であり、心理的には、子は父親と同一視し、その成長過程で、父の権威に同化したり、反抗しながら、父親との内面的対立を通して、自我を形成した。しかし高度工業社会の人間は、伝統や規範から自由になったか、同時に安定した秩序から得るものを失なった結果、攻撃性や依存性が強くなり、精神分析的に言えば、口唇期的傾向が増大し、自己愛的志向を

生んだ。現代社会のシンボルは、いちじるしく自己愛的傾向をもち、とりわけ身体的満足を与えるものへの志向が強い。個人の無力化の結果、誇大妄想的になって、人気者になることや、出世アニマルになるような様相を呈している。父親なき社会のあと、新しいシンボルとして横の連帯を強め合っていく友人としての「兄弟社会」への志向を提言したいが、個人が互いに競争相手であるような今日の社会状況では、兄弟社会の出現も、秩序への凝徹もまだまだであるという感が深い。（島田一男）

V 教授学における教育心理学の寄与

オーガナイザー 東 洋（東京大学）

座長 同上

話題提供者

a. 教育心理学への期待と注文

稲垣 忠彦（東京大学）

b. 教授、学習過程をいかに理論化するか

細谷 純（東北大学）

c. 実験室研究の有用性：認知的動機づけの場合

波多野 誼余夫（独協大学）

d. 教授学と教育心理学：その目的と方法について

吉田 章宏（お茶の水女子大学）

まず、東京大学の稲垣忠彦が、教育史および実践的な教授学の立場から、教育心理学に対する期待と注文を述べた。心理学と教育工学とをあわせて、そこにしばしば用いられる行動という概念が、客観的数量的に記述されないものを切り捨てているのではないかという疑問を提出し、教育学における重要な概念である「表現」をこれに対置する。稲垣によれば、表現というのは目的性を持った実践の文脈で選択的にとらえられかつ形成されてゆくものであり、同時に、ものさしにあてはめていくのではなく本質的個性的な洞察を志向するものである。稲垣は、行動を問題とする立場の学問と表現を問題とする立場の学問との間のコミュニケーションの欠如が両者の協力、交流および相互刺激をさまたげて来たことを指摘し教授学の形成に心理学的な方法および視点からの積極的な参加を要望した。

次いで東北大学の細谷純は、学問の領域区分にかかわらずよりも、実際にどういう教育をつくり出せるかということに関心を焦点化するべきであるという見地から、極地方式グループの理科授業の開発の考え方および実態を述べた。一語でいえば高いレベルのルールシステムを子ども達につくり上げる援助のストラテジー、およびその

ストラテジーを構成するための原理をみつけてゆくための実際的な方式であるが、一般的なことばに環元しての原理化ではなく、具体的な教材開発とその実践的検証に密着し、きわめて試行錯誤的であるとともにオープンエンデッドであるのがその特徴である。まず経験と直観と理論とを持ちよって仮説的なストラテジーをたて、それを実践し、実践の経過を教師とストラテジー、子どもの個性とストラテジー、および教師と子どもの間など多様な交互作用にまでわたって検討し、その結果にもとづいて構成しなおしてゆくわけである。この細谷の討論は、稲垣の提案に呼応している側面もあるが、稲垣提案では心理学と教育実践とがその間に橋をかけるべきものとして対置されたのに対し、細谷においては、心理学はその方法と発想とがチームメンバーとしての心理学者を形成していることを通じて意味を持つけれども、内容科学としてはすでに実践に融合して固有の境界を持たなくなっているといえるであろう。

これに対し独協大学の波多野誼余夫は、心理学の教育に対する寄与、特殊的なインプリケーションと、一般的なインプリケーションとをわけて考えることを提案した。前者は具体的な教授方法の開発に心理学の方法や知識が具体的な形で役立っていくことであり、後者は教育に対するより一般的な視点の形成の基礎としてある程度体系化された心理学的知識や原理が寄与することである。波多野の例示をそのまま用いるならば、関係代名詞をどのように効果的に教えるかというのは前者であり、外国語を教えることが子どもの知的発達にどのような影響を持つか、そしてそれならば外国語教育はどの程度にどのような形で導入すべきか、というのは後者である。このような区分に立つ時、細谷提案は特殊的インプリケーションの色彩が強いとし、教育における心理学の役割としては一般的インプリケーションも重要なのではないか

と提案した。そして一般的インプリケーションを豊富に発生するための体系の形成には、実践的な研究のみでなく、実験的研究の成果もまた重要であり得ると指摘した。

お茶の水女子大学の吉田章宏は、最終提案者として、行為者のことば (actor language) の心理学と観察者のことば (observer language) の心理学とを対置した。これはまた「教育をよくするための」立場と「教育を知るための」立場という形でも述べられ、波多野の特殊的インプリケーションと一般的インプリケーションとの区別とも或る対応を持つ。吉田の論点は、「知る」立場は「よくする」立場の部分として位置づけられなければならない、観察者のことばは最終的には行為者のことばにまで移されなければならないということである。そしてこれは単に研究者から実践家へのコミュニケーションをどうするかという水準の問題にとどまるのではなく、行為者のことばへの翻訳を前提としての知識の探究は、探究の方法、方向、単位などがそのような前提によって規定されるはずであると論じた。

これらの討論のすじをまとめて、司会の東京大学の東洋は、まず稲垣提案が心理学と教育実践とのことばの相互翻訳の必要を述べたのと吉田提案とが相呼応することを指摘し、その間で細谷は心理学者が行為者としての実践をどのようにするかということを重視し、波多野氏は観察者のことばでの心理学の知識体系を豊富にするのも心理学者のつとめであると強調したと概括し、更に各発言者の補足を求めた。稲垣は波多野発言との関連で、一口に実践を対象とするといっても厳密な科学的分析にたえる質のよい実践を対象にしなければ無駄が多いので、そういう質のよい実践を対象にし、たとえばそこではたらいっているイメージというものは心理学的にはどうとらえられるのか、という形で、単に知識の交流ではなく同じ対象に協力してとりくむという形での教授学と教育心理学との協力を期待したいと補足した。細谷は波多野提案に関連して、一般的インプリケーションというのはデータを論理的な形で一般化するか否かに依存するのであって、実践的なデータからでも一般的なインプリケーションはみちびき得るものであるとし、さらに教育心理学の教科書は従来、ともすれば不適当な一般化を誘発しやすい形で書かれていたのではないかと論じた。また、吉田提案と関連しては、行為者のことばという場合に、行政、運動、授業など、さまざまな水準で行為者があり、必ずしも「行為者」として概括はできないことを指摘した。波多野は、イメージの究明の必要に関して稲垣には

とんど同意見であること、特殊的なインプリケーションの価値は十分に評価するけれども、たとえば実践的な開発によってひとつの教材ができたとしても、その水準ではその教材のどこが真にレヴェヴァントであり、どこがレヴェヴァントでないかということは伝達されないもので、そこでとまっては仲間うちのことばにとじこめることになるのではないかと、又「特定のトピックをいかに教えるか」ということのみではなく、なぜそういうトピックを教える必要があるかという点まで心理学的な考察が立ち入る必要があるのではないかと、そのような文脈で今日の教育問題に必ずしも限定されないで考えようとする時、一見具体的な実践に密着しないかに見える意図的統制のもとの研究の価値も再評価されるのではないかと指摘した。吉田は、研究評価の基準は抽象的に客観的ではあり得ず、どういう集団の判定基準にうったえるかということを考えなければならないので、一般的という場合にも必ずしも意味の特殊グループは排除できないはずではないこと、実験研究の必要性についての波多野提案を容認しながらも、実験研究の結果と教育問題として知らなければならないことの対応づけをどうするかが同時に問われなければならないこと、を補足した。東はコメントとして、教授学の形成に心理学者が参加する場合、心理学としての方法や認識基準が保持され反映されることを通じて役割を演じ得るのであって、その意味での心理学の蓄積と可能性との範囲を見きわめる必要があると考えると述べた。

一般討論には十数分しか時間を充てられなかったが、慶応大学斎藤氏が、ここで問われているのは教育心理学研究のモチベーションが何であるかであり、よきモチベーション (子どもをよくするといういみで) のもとで自由に研究が深められれば教育心理学は不毛ではあり得ないのではないかと発言、国立教育研究所の某氏からは教育実践の持つ実際の価値の重要性のゆえにその角度からの評価が強くアピールするが、観察者の立場での体系構築を課題としてひらきなおる必要があるのではないかと発言、などがあった。

本シンポジウムは、司会者からの要請により各提案者は問題点を明確にするためある程度意図的に役割を演じたので、それぞれの研究姿勢ということになれば言い尽くされなかったことも多いと思うが、今後の教育心理学研究のあり方についての視野の拡大という意味で、充実した討論がおこなわれたと思う。主催者、提案者および参会者の各位に謝意を表したい。(東洋)